

貨幣の資本への転化

中尾訓生

1

マルクスは『資本論』の冒頭で「資本主義的生産様式の支配的である社会の富 (Reichtum) は巨大な商品集積として現われ、個々の商品はこの富の成素形態として現われる。したがってわれわれの研究は商品の分析をもって始まる。」(『資本論』 I. 向板・訳 45 頁) と述べている。

(マルクスの研究方法である) 下向から上向への転回点としてこの一節を読むとき特に注意しなければならないことは「富」の理論的性格を彼がどのように把握していたかの解釈である。彼は『経済学批判』の「商品分析のための史的考察」で古典派経済学において「富」がどのようにあつかわれていたのかを検討している。それは労働の二重性という視点から検討されている。この視点を彼が採用した理由はこれまでに至る彼の研究を跡づけなければ得られないであろうが^①この視点に課している彼の意図及びその視点が果している理論的役割は解釈できるであろう。

この「商品分析のための史的考察」は彼自身が述べているように「富」という領域を基盤にした生産的労働と不生産的労働にかんする学説とも不可分である。^② 彼は古典派諸理論が志向するところ及び、それらの歴史的特徴

① 労働の二重性の論理を、フォイエルバッハの宗教批判から跡づけているものとして、(『経済学批判の成立』副田満輝『経済学研究』15巻1・2号)がある。

② 「現実的な有用労働と交換価値をうみだす (setzende) 労働との対立は、どんな特定種類の現実の労働がブルジョアの富の源泉であるか、という形の問題としては18世紀中、ヨーロッパをさわがせた。だからそこでは、使用価値に実現される労働、あるいは生産物をつくる労働のすべてが、ただそれだけの理由でただちに富を創造するわけではないということが前提されていたのである。」(『経済学批判』大内・訳・岩波文庫・65頁)

づけを「富」の定義のうちに労働の二重性の視点から探っている。^③

そして彼は「富」やその源泉、また生産的労働や不生産的労働について語ることが最も少なかったリカードをブルジョア経済をすどく解剖したとして高く評価した。

「リカードは努力の結果、労働時間による商品価値の規定を純粹にしあげ、しかもこの法則がそれともっとも矛盾するようにみえるブルジョア的生産諸関係をも支配することを示した。リカードの研究はもっぱら価値の大きさにだけかぎられているが、この点ではかれはすくなくとも、この法則の実現が一定の歴史的前提に依存するものであることに感づいていた。」(『経済学批判』大内・訳 69 頁・岩波文庫)

マルクスはリカードの理論にすべてが時間によって表現されるというブルジョア社会の特質を読み取ったのである。

人間は労働時間によって、すなわちマルクスによれば無差別一様な抽象的労働によって、したがって量的差異によってのみ個性があたえられるというブルジョア社会の特質がリカードの量的規定の背骨にあることを見出した。

20世紀の後半、多くのマルクス解釈者は、貨幣をより多くもたらす労働ということだけで富を創造する労働＝生産的労働と規定することができるのか、どうかと神々の論争をしている。この論争は始祖、マルクスが「それは、主として二流どころに限られている論争である。というのは、この論争には重要な経済学者はだれも参加していないからであり、かえって、この論争は二流人の、なかでも特に教師ふうの編集者や概説書執筆者や、またこの領域での筆達者なディレクターや俗学者たちの得意とするところなのである。」(『剰余価値学説史』I・マル・エン全集・190頁)と結論したと同じ状況を呈している。

彼らはブルジョアの富については、あれこれとマルクスから引用合戦をするが、マルクスが全精力を傾けて明らかにしようとしたプロレタリアートの富については一言も語らない。ブルジョアの富のなんたるかをマルクスと同様よく知っているシュムペーターも、生産的労働と不生産的労働については「この埃にまみれた博物館むきの論題がともかくもわれわれの関心をひく唯一の理由は意味ぶかい考え方の討議も時としてはその意味を喪失して不毛の境に逸脱することがある仕方のまたとなき好例となるからである。」(『経済分析の歴史』4 1320頁、シュムペーター、東畑訳)と述べている。

③ L・ゴールドマンはマルクスに依拠して、ケネーを例にとりて「富」の規定の背後にあるものを深めている。

(『人間の科学と哲学』137～143頁・川俣訳)

サー・ジェームス・ステュアートにたいしては彼は次のように述べている。

「かれにあっては経済学の抽象的カテゴリーは、まだその素材的内容から分離する過程にあり、そのために混合しかつ動揺しつつあらわれているが交換価値というカテゴリーもまたそうである。……」(同上, 65頁) すなわち、無差別一様な抽象的な量的規定と質料規定が未分離であることを指摘している。

マルクスの解釈ではこの質料規定はいうまでもなく具体的な合目的、労働を基礎に説かれているわけである。彼は前述のリカード理論をこのようなステュアートをも含めた流れの完成として位置づけている。

それはたんに交換価値の量的規定の完成としてよりも、そしてまた、シュムペーターのいう分析用具の精緻化としてよりも^④「富」や生産的労働、不生産的労働に関する騒然とした議論が内包していたものの完成として位置づけられているのである。

あるときは、農業労働が、そしてまた商業労働が「富」の源泉であると主張された。アダム・スミスに至って、やっと労働一般が「富」の源泉だと把握された。彼らにあっては理論は富護得のための方法を示しているのであり、またそのため用具でもあったが、マルクスの眼には彼ら自身も何ものかの用具であると映じたのである。

彼がリカード理論を高く評価したのは用具としての人間がその理論のうちに登場していると解したからである。そしてまたそこにリカードの理論の限界をもみてとった。

④ 経済科学〔道具化された知識〕とイデオロギー〔ヴィジョン〕との関係について、シュムペーターは、「分析の仕事に応用する研究手筈のルールというものも、(道具化された知識の操作)ほとんどイデオロギーの影響から免れているのであって……熱情的な忠誠と憎悪とは確かにこれらのルールを歪めようと働きかけるであろうが、これらのルールの大多数は、イデオロギーによる影響をほとんどあるいは全然受けていないような分野における科学的実践によってわれわれに供されている。」(『経済分析の歴史』1, 83頁, 東畑訳, 括弧は引用者)と述べている。そして道具化された知識(限界代替率, 限界生産性, 乗数……)の精緻化の過程が経済学の歴史(分析用具の歴史)であるという。

『資本論』の冒頭で彼は分析の対象とした社会の「富」は商品であると断じた。そして商品には労働の二重性が表示されている (dargestellt) とした。労働それ自体を考察するのではなくして考察するのは商品であり、そしてそれに表示された労働を考察するというのである。

ここに僕は彼の理論的苦闘の成果をみる。そしてまた、それは、精神史の研究が当面する社会の分析において占める位置を指示している。

「富」の定義のうちに彼は古典派と同様に、そして異った方法で人間を投じた。同様にとっているのは、「富」の定義のうちに彼の歴史志向性をみることが出来るから、異った方法でというのは、その志向性は古典派にあっては理論の外側にあるのにたいして、換言すると志向性それ自体は対象化されていなかったのにたいして、彼の場合はそれが理論の内部にあるから。

彼が述べているように私達は商品を触っても、舐めても、どのようにしても労働の二重性なるものを感得することはできない。

労働の二重性はそれらに付されている社会的象形文字……1万円とか、2万円とか、……を解読するための用具である。ただし、この用具は(研究者)主体と(研究対象)客体とあいだに介在する道具のようなものではない。

彼にあっては主体は客体であり、客体は主体である。このことが表示された労働の二重性によって巧みに示されている。

対象としている社会では人々は商品に擬されることによって、すなわち商品を所持することによってはじめて社会の構成員として認められるということを彼は見抜いた。この社会の基本要素は商品交換であるとした。

そして、商品交換のうちに、まず彼は人間の基本的行為——労働——の顕現形態を確認することができるとした。これが、「経済学批判」の叙述が何故、流通＝商品交換から始められなければならないか、換言すると、流通が措定されなければならないかの理由である。^⑤ 彼は次のように述べている。

⑤ 「個人を越えた自立した力としての個人相互の社会的関係は、いまやそれが自然力、偶然またはその他の任意の形態で表象されようと、出発点が自由な社会的個人でないといふことの必然的帰結である。このことを直観するには、経済的範疇のうちで第一次的

「人間がその社会的生産過程で単に原子的な行動を採っているにすぎぬということ、したがって彼らの規制と彼らの意識した個人的行為とから独立した彼ら自身の生産諸関係の物財的な姿は、まず、彼らの労働生産物が一般的に商品形態をとるということの中に現われるのである。」(『資本論』I 向坂、訳 122 頁)

従来、冒頭の商品の性格については、単純なる商品か、それとも資本家的商品か、という論争が展開されてきたが、すでにみてきたように本稿では、この論争での、単純商品生産社会か、それとも資本主義社会か、というような歴史的次元とは異って商品を解している。^⑥ そして、このことはまた

総体としての流通が役に立つ。」(『経済学批判要綱』高木・訳 116 頁) マルクスが、この段階で問題としていたことは、「流通」を措定する方法であった。

- ⑥ 本稿では、『資本論』(=『経済学批判』)の展開基軸を労働の二重性(「商品に表わされた労働の二重性」,「労働過程と価値増殖過程」)におき、そこから解釈しているが、滝沢氏も同様の視点からみておられる。

氏は、人間の存在、行動の全体を本質規定と本質規定の表現=反映、の二重において把握される。

マルクスの「商品に表わされた労働の二重性」は、この人間把握を示すものであると解しておられる。

本質規定とは、「人間の物質的生産的労働に根源的な本質規定……略して、生産一般は、特殊歴史的なあらゆる生産様式の脚下に横たわる実在的基盤そのものの根本規定、いいかえると、歴史的現実的な一人の人の・人としての・生存ないし活動にとって真に直接的・永遠に現在の根源的規定を意味する。」(『現代への哲学的思惟』90 頁、滝沢克己)

本質規定の反映とは：「人間が事実に成立するということは、とりもなおさず、その支配に順応してか背叛してか、かならず何らか特定の形と程度において、永遠に現在の・あらゆる社会に普遍的なその本性を反映=表現しつつ活動するということである。この反映=表現の特定の形がすなわちふつうにいう特殊歴史的な人間社会・人間生活の形態にほかならない。」(同上、91 頁)

この本質規定とその反映との関係は、不可分・不可逆であると述べられる。

したがって、人間の歴史は、この本質規定に結局のところは導かれて進展するものと解しておられるようである。(同上、95 頁)

氏の以上の把握から、まず「商品」についての解釈が従来のそれとは、相違してくる。

従来のそれは、単純商品生産社会の商品か、それとも資本主義社会の商品か、という歴史的所属をめぐるの解釈であった。

氏は次のように解釈する。

「個々の商品の性格については、むろん歴史的現実的に現われた商品の形態を離れたも

「貨幣の資本への転化」の従来の解釈との相違に照応する。^⑦

2

彼は資本の措定に関して「資本の成立史を回顧する必要はない」としている。貨幣の措定のときと同様に歴史的叙述としてそれは措定されるのではないことを指示している。

のではない。しかしまたその現実的実証的な、いいかえるとただ感覚においてのみ確認されうる・規定にかかわるものではない。むしろただ、それを離れてはいかなる商品も歴史的現実的には成り立ちえない本質規定のミニマム——それ自身に独得なマクシムへの方向をすでに含んでいるミニマム——にかかわる論理的な言いあらわしである。したがってそれは、歴史的実証的意味ではむしろ資本主義以前の商品の規定をそのまま言い表わすものではないが、また典型的な資本主義社会のそれにかかわるものだとも言いえない。」(同上、96頁)

歴史的所屬をめぐっての解釈を否定されていることは本稿と同様であるが、問題は「本質規定のミニマム」といわれるものである。

これは、歴史を導くところの「自然即人間・個即類なる人間存在の本質」を意味している。(同上、28頁)「商品の主体として、人間は知らず識らず、人間の作り出したいかなる既成の社会的秩序からも独立な個人として、人本来の活動の第一歩を踏み出す。そこに、最初一社会の外から来ながら一步步社会の内部に浸透して既成の秩序に取ってかわってゆこうとする商品形態に必然的な傾向の積極的な原動力がある。」(同上、94頁)

氏が「経済学批判」の根拠を労働の二重性に求められている点では本稿と同様である。

本稿では、具体的有用労働によって開発、発揮される人間の可能性、創造性にその根拠を求め、その可能性、創造性は現実の社会では一般的抽象的労働によって表現を与えられた量によって評価されていると解した。

これは、氏の本質規定とその反映との関係に類似しているかもしれない。しかし、具体的有用労働と抽象的労働との関係は不可逆的であると解すべきではないだろう。両者は一体として解するほうが認識上の誤りを犯さないのではなかろうか。歴史は、X(氏のいう本質規定)を求めて進行するとは解されないからである。

確かに歴史の動力はマルクスにあっては、人間の可能性、創造性であると解されるがそれは、あくまで現実の仮象との関係においてである。

マルクスの例示でいうところの、人間の可能性、創造性は諸科学の深まりとともに認識の対象となり得るものとして、検討することができるものとして提起されている。もちろん、可能性、創造性、は仮象の世界(抽象的労働によって表現されている世界)と不可分のものとして検討されなければならない。

⑦ 『資本論の根本問題』毛利明子、「2篇2章、貨幣の資本への転化」を参照。

(一)

彼は全体としての流通のうちに容易に $W-G-W$ という形態と他に $G-W-G$
 $-G$ という形態を見出す。

(一)の問題点、 $W-G-W$ と $G-W-G$

という二つの流通形態を彼は即座にあたえている点である。 $G-W-G$ は「貨幣を資本の最初の現象形態として認識するためには資本の成立史を顧みる必要はない。同じ歴史が毎日われわれの目の前で行なわれている。」(同上, 189頁)と述べているところから、日常に観察される商品流通から導出されていると解される。 $W-G-W$ はどうであろうか。

$W-G-W$ も日常に観察される商品流通から導出していると解すべきか、それとも、 $W-G-W$ を単純商品生産段階を示していると解して $G-W-G$ を資本主義的生産段階を導出するための過渡期を示すものとして、すなわち、 $W-G-W$ から $G-W-G$ へと通時的に解すべきなのか。

本稿では、前者の解釈をとっている。多くの解釈者は後者を採用している。そして、 $W-G-W$ から $G-W-G$ への移行(転化)をいかに論理的に説明するかというところで論争が交わされている。本稿では、 $W-G-W$ は、素材変換そのものを示しているのではなく、社会への基本関係が顕現する場であると解している。社会の基本関係は $W-G-W$ として措定されるのであるが、措定を可能にした社会は $G-W-G'$ として維持、拡大している。

本稿では、「貨幣の資本への転化」の論理的内容は社会の基本関係の維持、再生が物的代謝として一体化するというを示すところにある。

(二)

両形態の差異を指摘する。この差異の指摘は、商品所有者、貨幣所有者の視角からなされている。(同上 190~193頁)そして、以下の如く要約している。

「 $W-G-W$ なる循環は一つの商品の極から発出して他の商品の極をもってとじられる。この商品は流通から出て消費に帰着する。したがって、消費、すなわち欲望の充足、一言でいえば使用価値がその最終目的である。これに反して、 $G-W-G$ なる循環は貨幣の極から発出して結局同じ極に帰着する。したがって、その推進動機と規定的の目的は交換価値そのものである。単純なる商品流通においては両極は同一の経済形態をもっている。それらはともに商品である。それらは、また同一価値量の商品でもある。しかし、それらは質的にちがった使用価値であって、たとえば穀物と衣服である。…… $G-W-G$ なる流通においては、それとはちがっている。この流通は一見して無内容に見える。というのは、同じものの繰り返しであるからである。」(同上 194頁)。

この差異の指摘で彼が強調しているところは、 $G-W-G$ は $G-W-G + \Delta G$ でなければ、その所有者にとって意味をなさないということである。例えば、100円を100円と交換することは意味がないのであろう。

そして、彼は次のように述べる。「 $G' = G + \Delta G$, すなわち最初に前貸しさ

れた貨幣額プラス増加分である。この増加分，すなわち最初の価値をこえる剰余を私は——剰余価値と名づける。したがって，最初に前貸しされた価値は，流通において自己を保存するだけでなく，ここでその価値の大いさを変化させ，剰余価値を付加する。すなわち，価値増殖をなすのである。そしてこの運動が，この価値を資本に転化する。」(同上，194頁)

彼は貨幣所有者の視角から考察して $G-W-G$ は $G-W-G'$ でなければ意味をなさないと述べておいて，上述の如く一転して $G-W-G'$ を価値概念で説明するのであるがその必然性は解釈できない。むしろ上述の「価値」は貨幣に，「剰余価値」は利潤としたほうが，「2篇」のこれまでの論理—所有者の視角—には合致する。

滝沢氏も「貨幣の資本化・労働力の商品化をすでに結果として現象している $G-W-G'$ という形からほとんど形式論理的な推理を用いて，あたかも偶然にそれに逢着するかのように導き出している」(『現代への哲学的思惟』35頁) 点に疑問を提起している。(註⑥参照)

もし，「1篇」で獲得された「価値」概念が使用されているならば， $W-G-W$ を素材変換だけを示すものとする解釈は誤りである。

上述の引用文は彼にあっては次のことを説明するためにあたえられている「流通 $G-W-G$ においては，両者すなわち，商品と貨幣とは，ただ価値そのもののちがった存在様式としてのみ機能し，……価値はたえず一つの形態から他の形態に移行してこの運動の中に失われることがなく，かくて自動的な主体に転化される。……価値はここでは一つの過程の主体となる。」(同上，199頁) 貨幣所有者の視角の展開は，ここでは貨幣所有者をも内包した全体的な，運動あるいは過程の論理次元に移行している。彼の「2篇の」説明からはこの移行を解釈することができない。

(三)

ΔG の源泉を求めて，流通過程では利潤(ΔG)は生じないとして労働力商品を導出する彼の説明は，(「1篇」の蒸溜法批判に照応した)ヴェームの反論を誘うであろう。

利潤は流通過程で生じるというヴェームに「対象化された労働」(=価値)という概念で反論できるであろうか。⑧

この説明の基礎は等価交換であり、等価交換は「対象化された労働(量)」によって確認されている。これは「対象化された労働」(=価値)概念を客観的実在物として解釈せしめる傾向をもたせる。換言すると、総価値=総価格というように論理次元の違いを混同せしめる。

さて、(一)は、(二)、(三)を導出するために措定されている。そして「2篇、貨幣の資本への転化」の要点は、(イ)労働力商品の導出と(ロ)「価値は……過程の主体となる。」ということを示明しておくことにある。というのは、これら(イ)と(ロ)は、「2篇」以後の展開を可能にする。

そこで、(イ)と(ロ)は、どのように「1篇」から導かれるべきかを検討していくことにする。「1篇」で明らかになったことは以下のようなことであった。

貨幣は社会の基本関係の体化したものであり、それ故にまた貨幣は社会的素材変換において決定的役割を果たす。換言すると、⑨貨幣の措定とは、A商品・x量 B商品・y量で示される歴史的特徴(=社会の基本関係)の措

⑧ ヴェームは、現在財(生活手段)と将来財(労働)の評価差、現在財>将来財、に利潤の源泉を求めている。(Bohm-Bawerk: Positive Theory of Capital P. 337, tran, by George D. Huncke)

置塩氏は、柴田敬氏を批判して「均等利潤率が何故に一定の正值をとるかという点を解明するには、投下労働価値の概念は不可欠である。」(『経済学研究』年報19「マルクスの生産価格論について」あるいは『経済学の現代的課題』所収「生産価格・平均利潤率」)と述べられているが、ヴェームもまた氏が解釈されているように(『資本制経済の基礎理論』76頁)、利潤率が正值をとることを「解明」している。しかも、投下労働価値の概念によらずして。

氏の場合、均等利潤率が正值をとる「証明」は、価値=死んだ労働+生きた労働、($t_i = \sum a_{ijt} + t_i$)、が前提される。(同上、50頁)

ヴェームの場合、現在財は将来財よりも高く評価される、ということが前提されている。両者は、それぞれの定義——マルクスでは、「定義」の発生を説明することが主要な問題——を基に剰余生産物の存在を解釈したわけである。氏のヴェームにたいする反論が、氏の定義を基礎になされているのであれば、それは十分なものであろうが、氏の反

定であった(Xは一般的抽象的労働の象徴)

マルクスは、注意すべきこととしてアリストテレスの例を引用して述べている。

貨幣の措定が可能であるためには富の源泉は労働一般であるというような(経済的)言語が必要であるということ。それは、商品交換 $W-G-W$ が社会の全面に及んでいるということである。したがって、A商品の所有者を規制しているXは、個別、偶然的なものではなくして社会的、一般的なものである。

かくして、彼の眼に映じた商品交換——素材変換を示していると同時に諸個人の意志からは独立した全面的相互依存の関係——は貨幣として措定された。この貨幣措定の困難——彼自身が全面的相互依存の関係のなかの一要素であるところからくる困難——は本稿の1で述べているように「労働の二重性」概念で克服した。

主体を客体とすること、及び客体を主体に還元することは、「具体的有用労働」「抽象的労働」によって可能とされている。

全面的相互依存の関係が総体的に把握できたのは、「具体的有用労働=合目的労働」の視点からであり、そしてこの関係の内在的分析を可能にしたの

論は、そうではない。(同上, 77頁)氏の不十分なる点は、氏の理解されている投下労働価値説と氏の資本主義観(私有財産に基づく分業)とが(『蓄積論』12頁~22頁)、論理的に結びついていないところにあるように思われる。

氏は、資本主義社会を特徴づける諸々の(経済的な)現象は「私有財産に基づく分業」に起因していると解釈されているようである。そして、氏の意図に反して投下労働価値説は、これらの現象を解明するための機能的な「分析用具」となっている。(『基礎理論』25頁~38頁)

氏の『資本論』解釈は明快で、問題の所在を適確に指摘している。本稿は氏の解釈から多くの示唆を受けている。

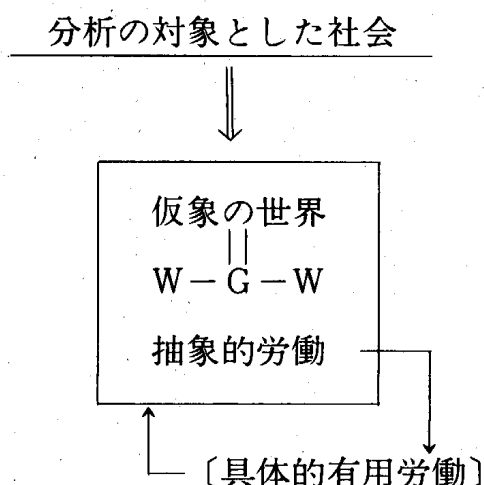
- ⑨ マルクスは、シェイクスピアの「黄金? 黄色い、きらきらする、貴重な黄金じゃないか?……」という『アゼンスのタイモン』を、1843年の「パリ草稿」にみられるとうり、一貫して引用している。

この詩に、マルクスは「対象とした社会」の本質を見出している。それは、「社会の基本関係」が表象しているところのものである。

(『資本論』I・向坂訳・171頁註91)

は「抽象的労働」である。

商品所有者の行動は主体を徹底して抽象労働化することによって分析することができる。しかし、主体はどこまで徹底しても客体そのものになることができないが故に、商品所有者の世界を仮象として把握するのである。



貨幣が措定されたことによって次のことが認識可能となる。

「商品交換は、共同体の終わるところに、すなわち、共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点に始まる。」(同上, 115頁)

なぜなら、生産物交換が商品交換として規定されるためには、交換者は相互に相独立せる主体としてたいすることが必要なのである。そして、交換者相互の関心は量として表現されている。さて、この量の世界においては彼らの間の差異を特徴づけるのは唯一、量の多少のみである。

商品交換の発展、拡大は、したがって相独立せる交換主体の拡大であり、交換主体から全体としての流通(=W-G-W)を考察するなら、それは、 $G-W-G'$ である。より多くの貨幣($G-W-G'$)を! という表象は歴史的事実(4篇, 相対的剰余価値の生産) $G-W < \frac{P_m}{A} \dots P \dots W' - G'$ という内実をあたえられる。

共同体の制約を離脱することが可能になったのは彼らが結果として新たな権威[Ⓢ]すなわち貨幣の追求者であったからである。

貨幣の形態諸規定は商品流通との関連で交換者が相互にとり結んだ関係を

明示する。

商品流通を貨幣と対照させることによってそれは明示される。

「商品流通そのものの最初の発展とともに、第一の変態の生産物、すなわち商品の転化された態容、またはその金蛹を確保するという必然と熱情が発展してくる。商品を買うためではなく商品形態を貨幣形態で置き換えるために商品は売られる。この形態変化が物質代謝の単なる媒介から自己目的となる。商品の脱皮した態容はその絶対的に譲渡しうべき態容、または瞬過的に過ぎない貨幣形態として機能することを妨げられる。これをもって、貨幣は退蔵貨幣に固定化する。そして商品の売り手は貨幣退蔵者となる。」(同上、169頁)

交換主体の貨幣 (= 富) 追求は商品流通と換言すると共同体そのものと、貨幣とが対抗関係にある。商品流通は共同体になりきっていない。したがって、交換者にとって「価値 (= 富) は……過程の主体」とはなり得ない。

しかし、商品流通の拡大とともにW—GとG—Wは分離するようになり、致富形態としての貨幣退蔵は消失してくる。商品流通そのものが、商品流通を連続^⑩拡大させることが、交換者には最高の致富形態と感得させるようになる。

商品交換の、この自由、平等の世界はマルクスによって仮象であると把握された。以下、仮象として把握し得る根拠、及びその維持、再生の構造をみていくことにする。

—労働過程—

根拠については労働そのものの考察からあたえられる。彼は、まず次のように述べる。労働によって人間は「彼自身の自然のうちに眠っている潜在能力を発現させる。」

⑩ マルクスは、シェイクスピアの「黄金? 黄色い、きらきらする、貴重な黄金じゃないか?……」という『アゼンスのタイモン』を、1843年の「パリ草稿」にみられるとうり、一貫して引用している。

この詩に、マルクスは「対象とした社会」の本質を見出している。それは、「社会の基本関係」が表象しているところのものである。

(『資本論』I・向坂訳・171頁註91)

⑪ 「支払手段としての貨幣が発達してくると、満期日の債務額のために貨幣蓄積を必要とするようになる。貨幣退蔵は、ブルジョア社会の進歩とともに、独立の致富形態としては消失するが、他方、逆にこの進歩とともに、支払手段の準備基金の形態で増大する。」(同上、184頁)

労働によって人間は他の一切の動物と区別される。彼は蜘蛛と人間の織匠、蜜蜂と人間の建築師を比較して次のように述べている。「最悪の建築師でももとより最良の蜜蜂にまさるわけは、建築師が蜜房を蠟で築く前に、すでに頭の中にそれを築いているということである。労働過程の終わりには、その初めにすでに労働者の表象としてあり、したがって、すでに観念的に存在していた結果が出てくるのである。彼は自然的なものの形態変化のみをひき起こすのではない。彼は自然的なもののうちに同時に彼の目的を実現するのである。」(同上, 232 頁) マルクスが「労働過程は、最初はまずいかなる特定の社会形態からも独立に考察されるべきものである。」(同上, 231 頁) と述べている意味は、外的自然との交渉による能力 (= 内的自然) の開発、及び無限の可能性、創造性ということを描出せんがためである。一般に解釈されているように「物質的財貨の生産は、すべての社会の存在と発展の根本的条件である。」ということをも物的生存手段の獲得とだけに限定すべきではない。彼のいう「労働者」とは窮極、上述の意味において規定されている。だからこそ「労働者」の眼にはこの社会は仮象と映るのである。

— 価値増殖過程 —

しかしながら、この社会では「労働能力」——「一人の人間の肉体、すなわち、人間の生ける人格の中にあつて何らかの種類の使用価値を生産するばあいに、人間が活動させる肉体的、精神的能力の総体」(同上, 217 頁) ——は価値 (= 対象化された労働) として過程としてではなく、結果からのみ評価されている。

労働能力の価値は労働能力の所持者の維持に必要な生活手段量^② ($B_1, B_2,$

② 「労働力の価値は、すべての他の商品の価値に等しく、この特殊なる商品の生産、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定される。……労働力の生産は、彼自身の再生産または維持である。彼の維持のために、生ける個人は、一定量の生活手段を必要とする。労働力の生産に必要なる労働時間は、かくしてこの生活手段の生産に必要な労働時間に解消される。」生活手段量は、一国の文化段階に依存している。したがって「労働力の価値規定は、一つの歴史的な、そして道徳的な要素を含んでいる。だが、一定の国にとって、一定の時代には、必要なる生活手段の平均範囲が与えられている。」(同上, 222 頁)

… B_n) の価値——生活手段の生産に必要な労働時間——であり、この B_i は歴史的に資本家と労働者の力関係によって決定され、等価交換——労働力と生活手段量の交換、そのためには、すなわち、自分の労働力以外は、なにも所持していない人間と生産手段、生活手段を所持している人間が際会することが必要である。資本主義的生産様式の結果ではなく、その出発点である蓄積を想定することが必要。——の形態で労働者にあたえられる。

社会的生産物が被支配者維持のための生産物 (B_i) と剰余生産物 (A_1, A_2, \dots, A_n) に分割されていることは、歴史的事実として、そしてまたケネーの研究によって純生産物・概念を彼は確認しているところである。社会的生産物の循環をA・スミスやD・リカードの研究を受けて労働時間 (= 価値) タームで表現しようとするのであるが、そのとき生じた問題は剰余生産物 (A_i) に対象化された価値 ($\sum A_i \cdot a_i$) の説明である。(a_i は剰余生産物一単位に対象化された価値。($i=1, 2, \dots, n,$))

なぜなら、労働者がT時間の労働の対価として B_i を得るなら、等価交換が前提であるから、 $\sum B_i b_i = T$ である。(b_i は必要生産物一単位に対象化されている価値。($i=1, 2, \dots, n,$)) すると、 $\sum A_i \cdot a_i$ はどのように説明されるであろうか。

この問題に彼は次のように答えている。

「労働力に含まれている過去の労働と労働力が遂行しうる生きた労働とは、すなわち労働力の日々の維持費と労働力の日々の支出とは、二つの全くちがった大いさである。」(同上, 251頁) として、等価交換のもとで $T > \sum B_i b_i$ を引き出すのである。

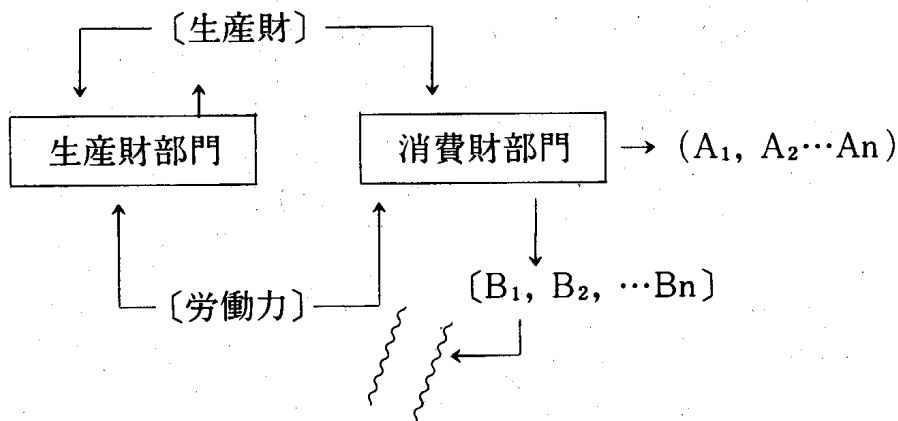
そして、 $T - \sum B_i b_i = \sum A_i a_i$ として $\sum A_i a_i$ を剰余価値、資本家が無償で受取る価値であるとしている。^⑬

かくして、仮象を表示する、 $G-W-G'$ は、 $G-W \leftarrow \frac{P_m}{A} \dots P \dots W' - G'$ 、と

⑬ 「労働」と「対象化された労働」の概念が不可分であることは、形成史的には、「商品の労働力・範疇の生成」(高木幸二郎『資本論』の成立)に所収)を参照

して社会の物的代謝をも表示する。「人間は宗教というもので、彼自身の頭の製作物に支配されるように、資本主義的生産においては、彼自身の手の製作物に支配されるのである。」(同上, 780 頁)

社会の物的代謝が労働価値のタームで表現されるということは、労働を唯一の本源的生産要素としているからである。



しかし、本源的生産要素が何故、他のものではなくして労働でなければならぬかは、マルクスの場合は、前述したように、この仮象を把握し得る根拠を労働＝人間の基本的行為に求めているからである。人間の可能性、創造性を無差別一様に量によって評価——労働力の商品化——するという無理をしているが故に、労働者の眼には、この社会は仮象と映るのである。

逆にまた、この社会はその無理の故に、維持・拡大するのである。

資本主義的生産過程は、労働過程と価値増殖過程の統一であるというとき、それは論理次元を異にした無理な統一なのである。

労働過程は人間の生命力そのものの燃焼＝労働であるが、価値増殖過程は常に一定の価値規準＝対象化された労働を前提としている。

前者が過程としての位置をあたえられるならば、後者は結果としての位置があたえられるであろう。

したがって、 $G-W \dots P \dots W'-G'$ を表現している価値は、どこまでいっても、窮極、労働を包摂することはできないから、この世界は安定したものとはなり得ない。安定したものとはなり得ないということは、物的代謝が好況・

不況を繰り返すという不安定を直接に意味しているのではない。

置塩氏、が明快に説明されていように資本主義社会は、上方及び下方への不均衡の一方的累積過程を繰り返しながら維持され、拡大するのであるが、この場合、労働者は価値創造者——ものを言わない死んだ労働用具から区別された、ものを言う道具——としてのみ、位置づけられている。労働者が舞台の主演となり得るのは、資本家が調整を誤って物的代謝を混乱におとし込んだときである。^⑭ このとき、彼らは新らしい社会を展望する。

しかしながら、労働者が「ものを言う道具」としてのみの存在であるなら、物的代謝が、いかに不安定であろうとも、資本主義社会そのものは、支配者の入れ替えはあるとしても、決して崩壊することはないであろう。

なぜなら、「ものを言う道具」としての人間の欲望は、 $G-W-G'$ ($W-G-W$) より生じ、そして、それは $G-W-G'$ を構成する要因であるから、彼ら＝労働者は資本家とともに物的代謝の安定に努めるであろう。

マルクスは「ローマの奴隷は鎖によって、賃金労働者は見えざる糸によってその所有者につながれる。」(同上、718頁)と述べているが、労働者が「見えざる糸」による束縛を感得するのは、いかなる場合であろうか。

彼は、このことについては、詳細に論じてはいない。これは歴史的制約によるものであろう。資本主義社会の論理的出発点に、資本家と労働者が、歴史的事実としてあたえられなければならなかった。この場合資本家の行動形態そして労働者階級の生活状態、そして、また、当時、周期的に生じる経済混乱＝恐慌が、可能性、創造性という面からの労働者にたいするマイクロ分析を必要とさせなかったのである。

本稿で言及している「1篇」の解釈は、「価値形態論の形成」「価値形態論の構造」「マルクスの価値尺度」(『山口経済学雑誌』22の5・6号、23の1・2号、3・4号)を参照

⑭ 『蓄積論』置塩信雄、250頁～261頁。